The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『狭衣物語』本文の研究
Author(s)	小林, 理正
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87780
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　小 林　理正　　）	
論文題名	『狭衣物語』本文の研究

論文内容の要旨

平安時代後期に成立したとされる『狭衣物語』は、たとえば『古今集』『伊勢物語』『源氏物語』などとは比較にならないほど、本文のヴァリエーションが豊富な物語である。その本文状況は、『枕草子』や『住吉物語』、あるいは『平家物語』のごとく混乱し、錯綜しているといえるだろう。それゆえ、『狭衣物語』研究では数多の伝本を参看し、各本文への目配りが必要となる。しかしながら、現存伝本数も一定量あるうえに、その本文は巻ごとに性格が異なったり、二つ以上の本文が入り乱れ、混態していたりする場合もあり、その考究は困難を極める。このような状況だからか、いまなお三谷榮一の系統論や中田剛直の伝本研究の成果を前提とする論稿が散見されるのであろう。もちろん、上述二論は再三再四の熟覧を要するものであり、『狭衣物語』研究において、それらを無視することはできない。しかしだからといって、先論の本文理解に問題がないと安易に判断するべきではない。たとえば三谷論稿であれば、巻全体をとおして一つの本文しか持たないとされる伝本は多数あるが、激しく揺れ動き、さまざまに混態する『狭衣物語』本文にあって、そのような本文の伝わり方は却って疑われるべき怪しさを孕んでいるし、中田論稿であれば異文のカウント方法が機械的に過ぎ、レベルの異なる本文異同を画一的に扱ってよいのか、という問題が残る。

先論とは一線を画す片岡利博による本文研究は、原『狭衣物語』本文への遡及や最善本の追求、系譜建設を行わず、無数にある本文のヴァリエーションを等価に扱い、詳密な本文読解・本文分析をつうじて、各本文の在り方または相互関係を解き明かすものであった。思えば、おびただしい数にのぼる本文や数多の伝本群から、唯一の、あるいは〝最善〟とされるものを見出す在り方そのものが、その成立から時を措かずしてヴァリエーションを獲得したと予測される『狭衣物語』に馴染むものではなかった。だからこそ、無数の本文を等しく扱い、それらの検討から浮かびあがってくる『狭衣物語』に注目する片岡論は、とかく本文が問題とされる『狭衣物語』研究にあって革新的であった。また、後藤康文や長谷川佳男らの考究も緻密な本文読解から本文の問題を剔抉するものであり、従来の三谷論や中田論とはレベルの異なる本文研究といえよう。片岡、後藤、長谷川らの考究の出現により『狭衣物語』研究は変革期を迎えたといえるのだが、こと本文をめぐる研究は物語論や構想論に比べて、行われることが少なく、いまなお充分な検討がなされているとはいえない状況にある。

上述の研究状況を踏まえ、本論文では従前の系統論および伝本研究の成果に留意しつつも、これに安住せず、各本文へのバイアスを排したうえで、以下、三つの視点から『狭衣物語』本文の検討を試みた。

一つ目は活字校訂本文に依拠するのではなく、写本のレベルに立ち戻り、そこに宿る情報（書式や本文）を検討する視点であり、二つ目は本文読解を通じて本文の問題に向き合う視点、三つ目は表記情報から浮かびあがってくる本文の具体相を手がかりに本文分析を行い、その出典や解釈の整訂を試みる視点である。　いずれも眼前の資料をどのように読み解くかという研究姿勢から本文研究を行った。本論文は上述の視点ごとに章を立てている。その構成は三章。各章および各節の概略は以下のとおりである。

第一章は、鎌倉写本に着目し、そこに宿る情報を扱う。たとえば鎌倉写本は、その親本に同時代写本を用いる場合もあるが、と同時に、平安写本を採用する可能性も充分ある伝本である。このように考えるとき、鎌倉写本を系統や類といった本文の枠組みで特定一本のみを考えるのではなく、写本群(丶)としてその有り様や、その本文の動態を取りあげれば、当該本の特殊性や、その書写年代における『狭衣物語』本文揺動の最大振幅が明らかとなるのではないか。如上の視座から写本および本文を考究するとき、既存の研究法に比べ、未知数である平安期本文の一端に触れられる可能性が高まると予測される。そこで第一節では、鎌倉写本が多数残存する『源氏物語』を例とし、鎌倉写本が平安写本由来の情報を今に伝えており、〝群〟としての検討が、それらを析出しうることを確認する。具体的には、まず、一般的な書式理解について整理した上で、天理図書館蔵伝西行筆本竹河巻の事例で知られる埋没書式や、甲南女子大学蔵伝為家筆本梅枝巻のケースで著名な〈別行×行頭〉書式を確認した。このような特殊書式は用例が僅かであることから、ともすれば作者の不注意と理解されることが多かった。だが、『源氏物語』の鎌倉写本群の渉猟から見出された特殊書式を訂正するケースなどは、不注意の一言で片付けられるものではない。本節では、これらの分析をつうじて当該書式が鎌倉写本の親本に想定されうる平安（末期）写本の名残であるとした。和歌書式をめぐる検討でこそ

あるが、同時代写本群に注目する検討から得られるものがあるという事実が浮かびあがったといえる。

第二節では、『狭衣物語』諸本の中で、最古とされる深川本の巻一を取りあげ、その本文が、従来考えられてきた在り方とは全く異なるものであることを論じる。三谷系統論によれば、深川本巻一の本文は一貫して第一系統の本文を有するとされてきた。しかし、同本・四九丁表に認められる丁途中の不可解な空白を手がかりに、その前後の本文を他本と比較・分析すると、既存の本文理解とは異なる見解が浮かびあがってくる。ここでは深川本巻一本文の再検討をつうじて、既存の系統論の再吟味を試みた。

第二章は、本文読解に重きを置いたものである。『狭衣物語』研究の中には通行する注釈書に依拠するがため、充分な本文読解がなされないままとなっているケースが散見される。だが、このような研究は既存の理解そのものが誤りである場合、その根底から見解を揺るがされることになる。本章では、物語本文の精読をつうじて本文の問題を浮かびあがらせたうえで、それらの解消を目指す本文の研究を行った。

第一節では巻一起筆部を取りあげ、その解釈および本文をめぐる問題を検討する。同起筆部は、山吹に規定された物語叙述となっているが、伝本群の中には山吹に加えて、藤を折り取らせるものがある。藤を持ち出す物語は、山吹に規定される叙述にあって不審が残り、本文の問題が想定されてきた。しかし、その疑問が解消されることは、現在までなく、当該課題はそのままになっている。本節では、精読をつうじて起筆部に藤を持ち出す要因が何かを明らかにし、そのうえで表現上の問題を検討、不審の残る本文の表現類型の調査をとおして、この問題への回答を試みた。

第二節では、巻四「返しどもなどのしどけなくならはし聞えたる〳〵」という一文を扱う。同本文「返しどもなどの」には語法上の問題が認められ、それらの解消をつうじて、当該本文を元の形へ復元することを目論んだ。語法上の不審を無理にクリアする場合、従来の理解では、本文の損傷を疑わねばならないことを明らかにし、本文史の整理を行うことで「返しどもなどの」が「がくしどもなどの」つまり「学士どもなどの」と本来あったと述べた。

なお、附節は、必ずしも本文読解に重きを置いたものではないが、本文異同をめぐる、その本文の先後関係を考えるとき、本文解釈が一つのキーワードになりうる可能性を模索したものである。

第三章は、本文の表記情報に注目し、検討を行った。この「表記情報」に注目する動きは、たとえば今西祐一郎を中心に行われた【表記情報学】をめぐる研究活動が早い例といえよう。ただし、ここでいう【表記情報学】とは「多くの写本の書承関係や位相を解明する」手掛かりとして挙げられるものであり、本論の「表記情報」をめぐる検討の方向性とは異なるものであること、申し添えておく。

第一節では、巻三の「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の典拠について、本文史の整理から浮かびあがる本文の形態を手がかりに検討した。なお、同本文をめぐっては既に先論があるも、どういうわけか、これが全く支持されていない。『狭衣物語』の本文揺動の有り様に鑑みれば、その方法論に問題を抱えていたといわざるを得ない先行研究の追試をも兼ね、本節では、出典未詳表現に対してどのような視座が有効なのか、また如何にして未詳本文の理解をひらいていくのが本文の在り方に不審を残さないのか、という方法論的課題と向き合う。

第二節では、諸氏がさまざま論じてきた「一しゆにみてり」という未詳本文を扱う。同本文をめぐっては、傍書や異本注記が本文化したとか、『新撰万葉集』所収詩との関係が疑われるとかいった先行研究がある。ただし、いずれの論も、書写過程における本文化プロセスの実態とかけ離れていたり、恣意的な漢文訓読に基づかないかぎり現出不可能な本文生成を想定したりするなどの問題を抱えていた。本節では、本文史の整理をつうじて、当該本文と同様の形態を持つケースから共通点を見出し、その点でもって典拠として想定されうる漢詩文を調査した。如上の検討をつうじて、従来指摘されてこなかった漢詩句が典拠である可能性を指摘した。

第三節では、巻四の「水のしら浪なる御有さま」という一文を取りあげ、その引歌の是非について検討する。通行する現代注は、いずれも『古今集』「いしま行く水の白浪立帰りかくこそは見めあかずもあるかな」（巻一四・恋歌四・六二四・よみ人しらず）を引歌とする見解で、おおむね一致している。だが、「水のしら浪なる御有さま」をめぐる解釈から浮かびあがる狭衣像は、源氏の宮をめぐって懊悩するこれまでの狭衣の姿とは異なるのである。この不審の解消を目指し、当該本文の分析を行った。本節では、まず通行する理解の整理を行い、そののち各種本文の様態を確認し、「水の」とある箇所に「みつの」との表記が一定数あることを押さえた。狭衣像をめぐる違和感を解消しつつ、かつ引歌として想定されうるものを精査した結果、検討本文は「水の白浪」と校訂するのではなく、「御津の白浪」と読み解かねばならないものであり、その引歌は『万葉集』歌であったと結論づけた。古写本では清濁を区別しないことがままあり、その場合「水」と「御津」は互いに「みつ」とだけ記されるため、区別が容易ではない。表記情報が解釈の問題にまでおよぶものであることが知られる好個の例として、本事例は位置づけられよう。第一節・二節とは異なり、本節からは表記情報を手がかりとする場合にも理解を誤るリスクのあることが浮かびあった。

以上が本論文の概要である。取りあげねばならぬ問題も数多く残されているが、本論文では、附節を含め、七本の論稿をつうじて、不明な点の多い『狭衣物語』本文の有り様、その一端を明らかにしうる検討視座の提示を目指した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　小林　理正　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	滝川幸司
	副 査	大阪大学　教授	飯倉洋一
	副 査	大阪大学　教授	岡島昭浩

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　『狭衣物語』本文の研究

学位申請者

小林理正

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　滝川幸司

副査　大阪大学教授　飯倉洋一

副査　大阪大学教授　岡島昭浩

【論文内容の要旨】

本論文は、豊富なバリエーションの本文を持つ『狭衣物語』について、従前の系統論および伝本研究の成果に留意しつつ、それぞれの本文に対して、校訂本文に拠らず、写本のレベルに立ち戻り、本文読解を通じて本文の問題に向き合い、さらに、表記情報から浮かびあがってくる本文の具体相を手がかりに本文分析を行うことで、その出典や解釈の整訂を試みたものである。本論文は、「はじめに」、第一章「写本を分析する」（第一節「平安（末期）写本の痕跡―鎌倉期写本の和歌書式から見えてくるもの―」、第二節「深川本・巻一論―系統論の再吟味に及ぶ」）、第二章「本文を読解する」（第一節「巻一・起筆部本文の読解―不審本文の再読解―不審本文憶説―」、第二節「巻四・「返しどもなどのしどけなくならはし聞こえたる所／＼」の解釈」、附節「引歌表現の本文異同雑考」）、第三章「表記を吟味する」（第一節「出典未詳表現覚書」、第二節「「一しゆにみてり」の本文分析―巻一・本文私註―」、第三節「巻四・「水のしら浪なる御有さま」考」）、「おわりに」で構成される。

「はじめに」で『狭衣物語』の本文研究の情況を整理して問題点を指摘した上で、各章に入る。

第一章は、鎌倉写本に着目し、そこに示される情報を扱う。第一節では、鎌倉写本が多数残存する『源氏物語』を例とし、和歌書式の分析を通じて、鎌倉写本が平安写本由来の情報を今に伝えており、〝群〟としての検討が、それらを析出し得ることを確認する。第二節では、『狭衣物語』諸本の中で最古とされる深川本の巻一を取りあげ、その本文が、従来考えられてきた在り方とは全く異なるものであることを論じ、深川本が、途中に存する空白の前後で二種類の異なる本文を取り合わせて作られた混態本であることを指摘する。

第二章は、本文読解に重きを置いた論である。第一節では巻一起筆部について、その解釈及び本文をめぐる問題を取り上げ、起筆部に藤を持ち出す要因を明らかにし、不審の残る本文の表現類型の調査を通して、本文の生成過程を論じる。第二節では、巻四の「返しどもなどのしどけなくならはし聞こえたる所／＼」という一文を取り上げ、語法上の疑問点を確認した上で、その解消を通して、当該本文を復元することを論じる。附節は、必ずしも本文読解に重きを置いた論ではないが、本文異同をめぐり、本文の先後関係を考えるとき、本文解釈が一つのキーワードになりうる可能性を模索する。

第三章は、本文の表記情報に注目し、検討を行う。第一節では、巻三の「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の典拠について、本文史の整理から浮かびあがる本文の形態を手がかりに検討する。その上で、本文揺動の様

態を分析することで、いかにして未詳本文の在り方に不審を残さないのか、という方法論的課題に見解を述べる。第二節では、諸氏がさまざま論じてきた「一しゆにみてり」という未詳本文を扱い、本文史の整理を通じて、従来指摘されてこなかった漢詩句が典拠である可能性を指摘する。第三節では、巻四の「水のしら浪なる御有さま」という一文を取りあげ、その引歌認定の是非について、各種本文の様態を確認して、「御津の白浪」と読み解き、万葉集歌の引歌とすべきであると論じる。

「おわりに」で各章の内容を整理し、写本に遡って本文を読み解く必要性を改めて示す。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の最大の成果は、写本に遡って本文を検討することによって、これまでの系統論の不備を指摘するのみならず、系統論では示し得ない、本文の様態を明らかにしたことである。

第一章第二節の深川本の論は、これまでの系統論の不備を論じ、もっとも信頼できるとされていた深川本神話を打ち崩したといえる。深川本に見える空白の前後で本文の系統が異なることを詳細に論じ、深川本が混態本である可能性を指摘したことは、深川本に依拠する多くの研究に根本的な再考を求める貴重な成果である。深川本の不審については既に先行研究もあるが、その先行研究とは異なるレベルで深川本の不審を剔抉したことは大きな成果である。

第二章において、本文精読を通じて本文の不審点を指摘し、新たな解釈、本文校訂案を提示したことも大きい。これらは伝本における表現類型の丁寧な分析から導かれたもので、今後の研究の指針となりえるものである。

第三章は、表記を中心に、出典未詳とされた部分の出典を明らかにした論で、本文系統にとらわれることなく、鎌倉期、室町期の本文揺動を、特に表記情報に着目して分析して、その本文読解、本文の出典を指摘したことは、分析方法を含め、高く評価されると考える。

本論文は、片岡利博氏、長谷川佳男氏、後藤康文氏の狭衣物語研究を継承し、さらに新たな視点も交えて展開させ、また、加藤昌嘉氏の源氏物語における本文揺動の研究方法を受け継ぎ、狭衣物語の本文研究に新たな成果をもたらしたといえるであろう。

一方、論述に独特の言葉遣いがあり、却って論旨を不明確にする嫌いがあったり、論文の構成に不備などが存する。しかし、これらの点は、今後改善されうるところであり、本論文が狭衣物語を始めとする平安時代の物語や中世王朝物語研究、また本文研究に新たな視点・成果を加えたことは確かであり、今後さらなる研究の発展が確信される。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。